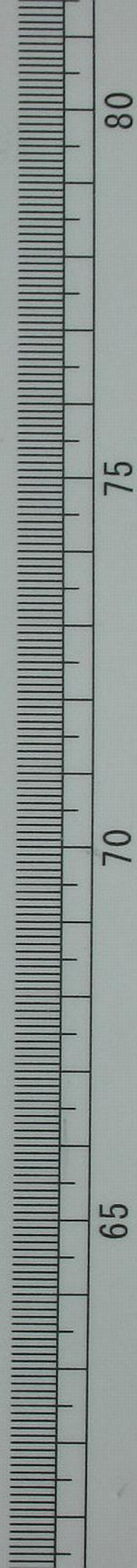


通俗

渡邊義方編輯
日本小史

第八編

上



A557
15

赤崎延房檢閱
渡邊文京探觚

梅堂國政畫

通 俗
日本小史

東京書肆

金松堂發兌

48-8446

日本小史



一之

二

三





日本小史



上
 尊氏鎌倉より返るるに
 起り官軍追討竹下の
 戦ひ利を失るひ義貞
 敗れて京師より歸り尊
 氏京師より幕入るる
 車駕叡山より行幸す
 まはるる

下
 官軍尊氏を撃破り京師を
 恢復し尊氏西海より走る
 賊焰再び燃え朝敵九州
 へ蜂起し節度使義貞賊
 徒追討の宣旨を奉下
 る九州へ進發する
 まはるる

通日本小史 第八編

通日本小史八編之上

東京

深崎延房檢閲
渡邊文京操觚

却つて説く後醍醐帝ハ素より賢明ニ渡らせたまふ人
 苟且偷安ニ流したまひ徒に女謁内奏を以て偏頗の
 政事殊に多く賞罰皆愛憎より出で稍やく治世に倦た
 らし隙を窺ふ奸臣尊氏密に異志を抱き人心王
 室の不當を怨み勤王の將士等も流石名家の名を慕
 ひて多く尊氏に瞞着され皆其部下に從ふ者あり

折と得たりと尊氏ハ遂ニ鎌倉ニ拠て反旗を翻ラヘ
一自立して征夷大將軍関東管領と称し府と源頼朝
ク旧跡ニ開き新田民の食邑関東ニ在る者と悉く掠
奪して將士ニ分ち與へ務めて人心を服從せしめ上
と凌ぎ下と虐まる強暴無道の挙動ありと京師の騷
動一方多しを而して尊氏ハ書と朝廷ニ上りて義貞
の罪と鳴を其書ニ曰く嚮日東藩北條高時返逆を企
つるに當りてや臣尊氏身を拔んぞ大義を首唱へ
兵を率へ逆賊高時と一戦ニ討亡し今日め治安と

得るに至る其功其勞極め大なり義貞ハ之ニ反し
止と得ざるに際して事を率へ遷延數日し渉り臣が
京師と定むると聞及んで賊と討と名と一三
戦へども勝能を僅に守計と成し過お臣が長男義
詮下野ニ義兵と率へ勢ひ尤も盛んなるに依頼し其
應援を借し得て鎌倉の空虚と襲ひ斬やく勝とトを
るを得し此時に當りて義詮の應援微りせば義貞
争でめりる偉功と奏せらるを得ん然るに何ぞや功を
奪ひ罷し誇り敢て恩賞と望む實に國家の蠹毒と

謂べー今臣外あり在て乱賊らざと夷いらげ矢石いせき雨注うらちゅうの下と
 冒あま甘んあまトて幾いく予その艱苦えんくと嘗なり赤心せきしん國くにを報むかひんと
 するも内うちの諛諂ごんごの佞臣べいじんありて臣しんと罪つとを陷おとひしん
 とは是こゝ趙高しやうこう秦しんと専せんらるる章邯しやうかん楚そを降くだるの謂いは非ひむ
 や仰あやぎ願ねがひ明詔めいせうと得えて義貞ぎしんと誅つとせんをと非ひを
 飾かざり文ぶんと粧よそひいと長々ながくと書かきりりる義貞ぎしんもままく尊たう
 氏しが已おを罪狀ざいじやうせしと聞きき乃すなはち上書じやうしよして曰いく嚮きやうは天
 下てん大だいは乱らんと乘輿じやうい左遷させんせらるるま當ありて楠正成なんせいせい等の豪
 傑けつ並び起おこり相共あひあり王事わうじを勤つとめまりき特とくり足利あしき尊氏そんし

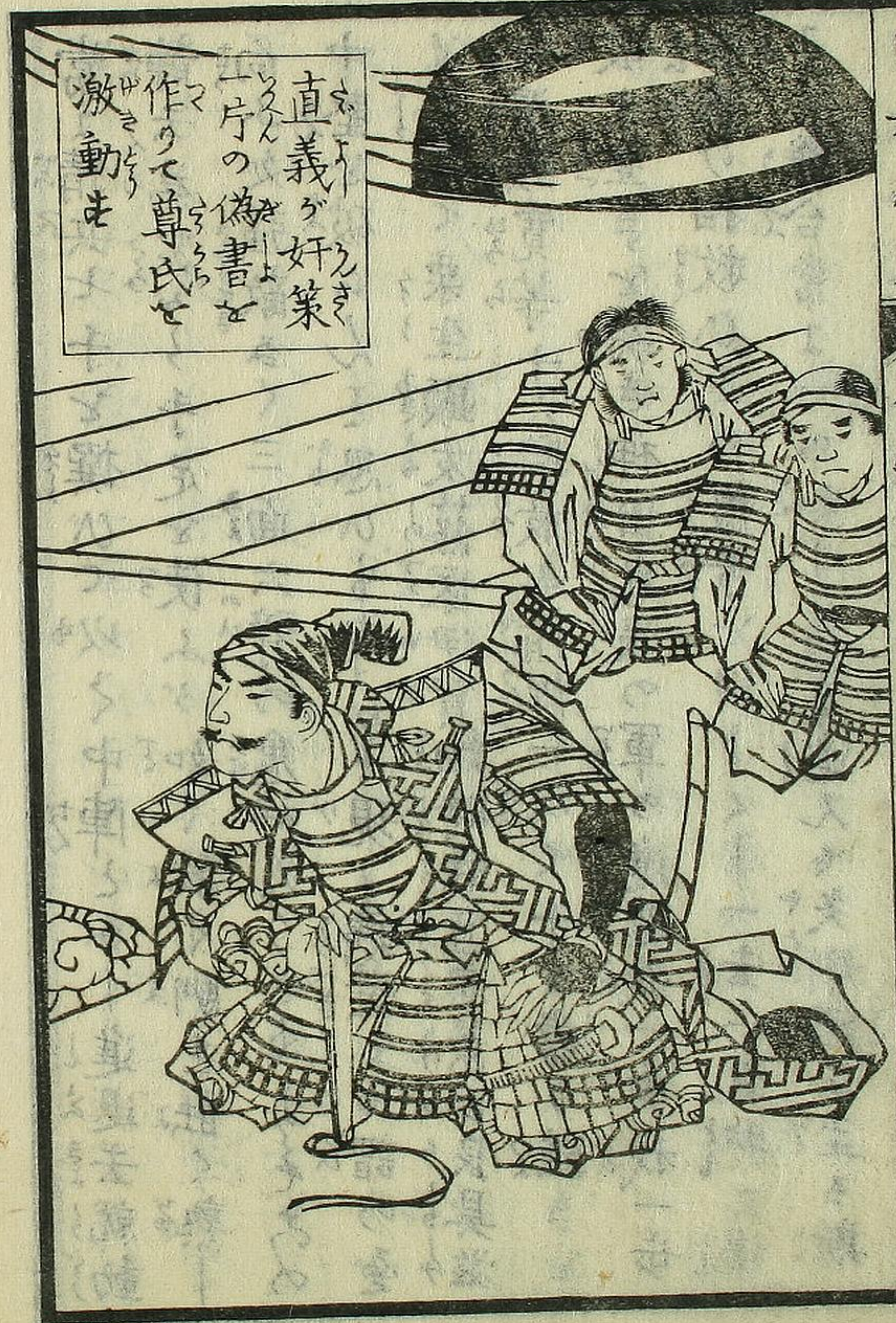
首しゆ巖がん兩端りやうたん常じやうは勝敗しやうぱいと眺ながめその勢いきやひは附つんとを賊軍ぞくぐん
 利りと失うふふは非ひざるよりハ決けつして順じゆんは帰かへせざるや
 明あきけし其功そのこう実じつは微々ゐいたるも我朝廷わがてうていの優渥ゆうおくなる罪つとの
 疑うたがひしまま輕かろきし小従せうじゆひ功こうの疑うたがひしハ重おもきと主しゆと
 非常ひじやうの恩典おんてんは浴よくせしも心こゝろは飽あると知しらせて妄まがま
 非望ひぼうと冀きがし臣しんの忠義ちゆうぎと讒害ざんがい一ひと言ことと巧たくまみし一ひとと陷おと
 入いさんとを臣しん五月ごご八日はつにちと以もつて義兵ぎへいと上野かうのを奪あげ彼
 その七日しちにちを以もつて六波羅ろくはらを攻せむ而しかるを臣しんが京師きやうしの復たが
 まると聞きて兵へいと起おこせしと誣告ご一ひと以もつて天聽てんていと欺あむく

その罪一也臣五月二十二日を以て諸軍を率めて高
時と誅戮一畢んぬ彼の兒子義詮が從士僅に百余人
を率めて鎌倉に入り實に六月三日なり時日の相
距る旬日餘事の難易概して知るべし然るに何ぞや
臣その兒子が力に頼りて功業を成すと得たりと云ふ
誣告讒害其罪二也彼輩下は在りて擅りて親王の
士卒を誅す其罪三也征夷大將軍の職は兵部卿護良
親王の任にたまふ如きなり而して彼その號を掠め自
ら征夷大將軍と稱を朝憲を蔑如し王室を憚らざる

其罪四也王命を矯て管領と稱し務て威福を張る其
五也中興の偉業へ天運は因ると雖も抑々まは兵部
卿の策略尤もその多きは居る而ると彼百方讒機を
構へ金と録りて讒者の舌鋒遂に流罪は抵らむ其
罪六也陛下を兵部卿と罪したまふと其の悔悟と期
したまふ單一且の懲戒なるは彼私一の怨とを狹
をさすみ恐を多くを士卒に幽囚を其罪七なり直義乱
に乗じて遂に又と兵部卿を加ふ大逆無道その罪八
也この八罪天地の容れざる如きにして許さべきもの

らむ今よりして誅せむんべ斧と用ふるの患ひあらん
願くへ陛下あまると照覽いたまひ尊氏追討の明詔と
賜らんとも紙と會々護良親王の侍婢親王の首級と齋
ら一京師より上りて直義が絺逆の慘状と奏せあぐみ
於て尊氏が及跡天下より暴ら建武二年冬十一月朝廷
詔旨と下りて尊氏が官爵と褫奪し尋で追討の命と
下り節刀と義貞に授けて諸將と總しめ徵兵六万皇
子尊良を奉りて大將軍とる一東海道より進撃を官
軍の別隊忠良親王一軍を以て東山道より進む義貞

常より精兵七千を撰びて以て中陣とる一進退去就動
静云為宛がう手足を使ふが如く能く馴れ能く熟し
向ふ処強敵多く三面六臂の鬼神たりともよをその
中堅を破らんと思ひも寄らま現は錢壁とも謂つて
く而して栗生頭友篠塚伊賀畑時能直忠景由良具滋
長濱頭寛等十六騎最も精悍一以て千より當り強きを
破り堅きと突き神出鬼没の軍の進退彼一步我一步
相扶け相救ひその徽号と同トく一去一就興し俱
み一離合常より一の如し義貞進んで矢矧河に至る斯



直義が奸策
 一片の偽書と
 作りて尊氏を
 激動せ

田代心
 五
 八
 一

と聞^きらう賊^{ぞく}軍^{ぐん}も防^{ぼう}戦^{せん}の準^{じゆん}備^びを整^{ととの}へ直^{ちやう}義^ぎ以^い下^げの賊^{ぞく}將^{しやう}
 等^ら尊^{そん}氏^しの前^{まへ}に相^{あひ}會^{かひ}して軍^{ぐん}事^じと議^ぎし甲^{かう}論^{ろん}し乙^{おつ}駁^{はく}し軍^{ぐん}
 議^ぎ置^ぢ々^ぢ未^まだ決^{かく}せむ尊^{そん}氏^しに始^{はじ}めよう腕^{うで}又^{また}ぬまき頭^{かぶ}と
 低^ひき暫^{しば}し黙^{もく}して居^ゐらう一^いが數^{かず}回^{かい}歎^{なげ}息^{いき}し愀^{しう}然^{ぜん}として
 言^いへるやう今^{いま}我^{われ}朝^{あさ}敵^{てき}の名^なと蒙^{まう}り追^お討^との軍^{ぐん}勢^{せい}と差^さ向^{かう}
 られしその原^か因^{いん}を尋^{たづ}ねむ護^ご良^{りやう}親^{しん}王^{わう}を弑^し虐^{ぎやく}せしと
 檄^{げき}を飛^といて兵^{へい}と集^{あつ}め國^{こく}家^かを乱^{みだ}さんとせし二^にツの罪^{つみ}
 り外^あありむおの二^にツの罪^{つみ}たる尊^{そん}氏^し嘗^{なげ}て知^しらざる
 処^とろ直^{ちやう}義^ぎ等^らが我^{われ}に知^しらせむ陰^{いん}に為^なせし行^い事^じみれど

臣^{しん}の罪^{つみ}も君^{きみ}の罪^{つみ}今^{いま}更^{さら}らふも益^{えき}なき繰^く言^{ごんごん}朝^{あさ}敵^{てき}の名^なと
 受^うけりとも此^こ等^らの由^{よし}と愁^{しゆ}訴^そして謝^{しや}罪^{ざい}するより外^ある
 る一^い追^お討^との官^{くわん}軍^{ぐん}に抗^{かう}ひて干^{かん}戈^がと動^{うご}りし後^{こう}世^{せい}も汚^{よご}名^な
 を殘^{のこ}さる心^{こころ}ありむ益^{えき}なき軍^{ぐん}議^ぎにせむもわれ我^{われ}が心^{こころ}
 をや決^{かく}せり諸^{しよ}君^{きみ}も領^{りやう}承^{せう}し只^{ただ}此^こ上^{じやう}に謹^{きん}慎^{しん}して罪^{つみ}を待^{まち}
 める臣^{しん}下^げの本^{ほん}分^{ぶん}我^{われ}詞^じと聞^ききて官^{くわん}軍^{ぐん}抗^{かう}つる弓^{きう}彎^{わん}は
 我^{われ}身^みに及^{およ}ぶ加^かふも齊^{せい}し心得^{こころえ}するやと宣^{のり}示^しを鶴^{つる}の一^{ひと}
 聲^{こゑ}大^{だい}將^{しやう}の流^{りゆう}石^{せき}の爰^{こゝ}に順^{じゆん}逆^{ぎやく}の道^{みち}理^りを覺^さる尊^{そん}氏^しが殊^{しゆ}勝^{かつ}
 の詞^{ことば}案^{あん}も相^{あひ}違^{ちが}ひ尊^{そん}と立^たつる直^{ちやう}義^ぎ以^い下^げ諸^{しよ}將^{しやう}も目^めと

目と見合せと又言りもなうをくるかくて二三日
 と過しけるが賊將佐々木道誉密に直義に告て曰く
 傳へ聞く義貞の大軍既に入ると然るは我兵
 忙然と手を束ねて敵の来ると待つ其危きおと知る
 べし仮令尊氏躊躇するとも我々争りかくて在るに
 尊氏が心と激せしむるその計策の後よりをまて詮
 術もあるべきあり如き矢矧河の嶮に拠りて而して
 敵と防がんものと説けば説く直義道誉類を以て
 集まる兩奸兵と促し進んで矢矧河の東岸に陣し兩

軍河を挟さんで相對を軍機微妙き義貞の兵を分ち
 て二派とまし左右よりして齊しく渡り鯨波を揚げ
 つ挑む戦ふ左にさせと賊軍も同トく兵と操出し
 射戦の時と移まらち謀り設けし官軍へ河の中央を
 渡りし時烈しく射出を賊軍の矢面に立つ足をと
 ろるるるとあり當りうねる風情して且戦ふは且
 卻ぞく佯り逃ぐとも知らざれば迅り切る賊軍
 へのこの因と援きを攻立よ進めくと采配を揮切る
 をより直義が指揮し群立つ總軍勢左右に分ちて

追撃よど時機はりと大將義貞賊の本營空虚と
察す中軍より討て出で撰り抜くる精兵七千粟生
篠塚畑直由良長濱十六騎と前後左右より引従がへ
丸も備へを立直まよと見る間も早くも飛来るその
勢ひ破竹のぶとく電光石火忽ち河の真中を渡り
来て面も振らぬ突入り是れを驚き胞くも一敗地
も塗れ盛らんを金た気力もなしく漸やく敗兵を引纏
め退がへし鷺坂の陣を義貞逐ふてあきと攻むるも
敗立たる癖なれば手もなしく打負けし退がへし手

越河原の陣を義貞の追撃もあつく急たり暫しへ爰も
聞えしと敗兵争り勝誇りする官軍も勝を得ん直
義志を狼狽して辛うて鎌倉も逃帰る義貞續いて
伊豆の府に入り暫し兵士の疲労を休め日と刺して
鎌倉も進撃せんとし去程も尊氏も既も帰順の心決
せしものうら流石も戦争の気もあがり果して如何
ゆらん待甲斐絶て奈麻與美の由あは事と企て
罪も罪をば重衣の戎衣とやそ解きあはれた此世
の塵と諸共解脱するたる無明の醉醒て跡なき罪

日本書紀

科と謝する為とて髪を断り建長寺に入り墨染の
衣を着換る鎧の袖心の内を殊勝ある大将如此と
鎌倉に集まる処の賊軍愈々益々氣を失ふ敵を
防ぐの意もなく只徒らふ狼狽な時賊將上杉重
能直義と相謀り得るをぬ檄文二三通を偽作し尊
氏兄弟を追討の為諸品を下し賜ふと云ふの倫旨
りと討給し尊氏に示して曰へるやう是れおれ今朝
しも敵の士卒とうち取りし処をが鎧の袖より出
るまると尊氏取て聞かると其詞は云く足利尊氏直

義以下の一族武威を誇り朝憲と輕蔑をその罪決
て許まへりて依りて征罰せしむるものなり縦令面
縛して軍門に降り悔悟自首して髪を剃り謝罪の實
を現えをともて刑伐を寛まへりてのあり云々と
ぞ書りて尊氏ありて依りて熟視する良久しく血走る
眼を怨みの涙悲憤の面色凄しく齒を切去り
腕を扼し睨み詰たるその有様仕濟しとらと兩個
の奸雄膝より寄せり詞を揃え此故よとを我々が
疾より思ひ立たまるとお勧め申せり此事とれ

日本書紀 八編上 一三

備ふ義貞等の諛者^{ぎんごう}が所為^{しよゐ}と覺え^{おぼ}しり免^くても角^{かく}ても朝敵^{あそ}の汚名^{せうめい}を受^うけ上^あり只成敗^{ただせがひ}を天^{あま}に任^{まか}せ一^{いつ}拳^{こぶし}して君側^{きみがはら}の悪^{あく}を鋤^すき奸^{けん}を除^{のぞ}くハ今^{いま}此時^{このとき}義貞^{よしさだ}さん擊^{うち}取^とるバ天下^{てんか}に恐^{おそ}る者^{もの}あらずト彼承久^{かのしやうきう}の故^{ゆゑ}事^{こと}と今^{いま}を思^{おも}ひ當^{あた}りたり是^{こゝ}ぞ干戈^{かんが}に争^{あそ}ふとたハ朝敵^{あそ}と呼^よび官軍^{くわんぐん}と称^{なづ}せらるるも世^よの乱脈^{らんまつか}を平^{ひら}らざる勝敗^{しょうぱい}如何^{いかん}の上^{うへ}に在^あるの今^{いま}更^{さら}何^{なに}と躊躇^{ちゆうちゆ}踏^ふふベし疾^{はや}々^は思^{おも}ひ立^たたまふと西雄^{さいゆう}右^{みぎ}より左^{ひだり}より煽動^{せんどう}立^たる軍配^{ぐんぱい}の風^{かぜ}は偃^ひま尊氏^{そんじ}も稍^{しやう}おの謀書^{ぼうしよ}は心乱^{こころまじ}は真^ま

正^{ただ}なりと思^{おも}ふみぞ太^{おほ}き息^{いき}と吐^つきけり人^{ひと}を怨^{うら}めしき哉^や新田^{あらた}義貞^{よしまさ}かくある上^{うへ}に是非^{ぜいひ}もなれ吾^{われ}亦^{また}當^{あた}り諸君^{しよきん}と俱^{とも}に弓^{ゆみ}箭^やを執^とり死^しするも生^なるも時^{とき}の運^{えん}義貞^{よしまさ}と擊^{うち}つ擊^{うち}つるに進^{すす}んで決戦^{けつせん}まきまきありと着^{ちか}せし法衣^{ほふえ}と脱^ぬ捨^すてざりくと着^き下^{くだ}ま緋威^{ひゑい}の鎧^{よろい}と粧^{よそ}り錦^{にしき}の直^{ちか}垂^たまふ修羅道^{しゆらだう}よおち蒐^くる人^{ひと}の心^{こころ}の定^{さだ}める浅^あましくも又^{また}是非^{ぜいひ}もなれ尊氏^{そんじ}再^{また}び出^いると聞^きたり諸軍^{しよぐん}の士氣^{しき}大^{おほ}き奮^{ふる}ひ將^{まさ}に逃降^{にげくだ}らんとせし者^{もの}も四面^{しよめん}より來^きり附^つき一日^{いちにち}より三十萬^{さんじゆばん}騎^きの多^{おほ}きを得^えたり是^{こゝ}

日本書紀 卷之八

於て直義より六万を將とし、管根嶺の嶮より、
 官軍を防ぐ而して、尊氏自ら十八萬騎を帥めて、鎌倉
 を發し、竹下を陣を是に於て、義貞ももて復兵を勒し、
 忠良親王を上將とし、殿屋義助を次將と定め、七千餘
 騎を授けて、竹の下に敵を當らしめ、義貞親ら七万騎
 を將とし、管根嶺に向ふ官軍の先鋒、菊地武重先づ
 進んで、戦端を開き、直ち賊軍を突破り、頻に進んで
 攻戦ふ、義貞ももて高きに登り、金鼓を鳴し、鯨聲を揚
 げ、鏡氣と助け、或いは離れ、或いは合ひ、嶮き山路、

事ともせず、追つ追はる、兩軍勢入は、乱れ入は、違ひ、
 を削る、修羅園場戦争正に、酣央なり、是時、當つて、竹
 の下の戦ひ、稍盛ん、官軍弱き、ゆゑ、孫ども寡、
 敵に難く、賊を、目も余る、十萬余騎、而して、我兵を顧
 ん、れ、僅に、萬を充ざる、小勢、されども、次將、殿屋、義助
 は、万夫不當の、英傑、あり、強將の下に、弱卒、多く、従ふ
 遅兵、を指揮、なす、群がる、賊の、真中へ、面も、振ら、
 て、入り、縦横、無尽、に、馳ち、右往、左往、暴迴り、志を
 く、賊軍、と、うち、破れ、彌が、上、も、彌増る、大軍の、事

ふしなれば撃ども突ども退ぞうを敵を新手を引換
是ど此方の始終の戦ひ疲れ心敢果も恐れども
如何まなき術なく戦ひ遂も利と失もひ大ひも敗れ
て潰へ走る勝も乗たる賊將尊氏もまなく進んで伊豆
よ入り義貞の後と襲ひ前後より一と夾と撃つ官軍
下さび利と失も入る塩谷高貞等と始めとして皆尊
氏の威风と慕ひ叛いと賊も降り順も叛きて逆も帰
まるとその比々相續き残兵僅も五百騎をうりま
その義貞進退谷まり管根と邵をたて西も走る菊地

武重等追属も尊氏の兵數十万路と遮つて要撃を
賊軍四面も充満し生べくもあらずさるものうら
義と泰山の重きよ比一命と鴻毛の軽きよ置く忠
臣勇士等事ともせむ勇氣凛然嘗て撓まぬ衆生願
友篠塚伊賀鞍と扣へて衆と顧み笑と含んで謂へる
やう一騎當千と諸君の謂も我數度の戦場も臨
とこれと未どかろ小勢と以て大軍の中を横行せし
烈しき戦ひとるせしあとま一疾や案内仕まりらん
諸君も續いて通られよと馬も一鞭當るや否衆も先

田代小地八編三

十一

義貞僅ふ三
 百騎と以て賊
 軍數十万の中
 を横行す



義貞傳
 八編上

義貞傳
 八編上

十六

ざら賊軍の群ぐる中より割て入り或ひ蹴倒し突倒し
 薙立て斬立て進み行くその勢ひ脱兔の如く人なき
 境を行き齊し賊争らるる義貞又薄り矢を掛け石を
 飛し我撃取らんと決り合ふ最も危うた一期の浮
 沈かくと見るより篠塚伊賀らる小賢しき挙動らる
 疾や蹴散し呉んむと飛込て来る電光石火閃めく又
 の光りと俱し賊九人を斬倒せむの猛勢ふ辟易し
 て餘賊まゝ敢て進まむ手と束糸てうち視て在り美
 貞行々敗兵を收め二千人を得たり天龍河に至り

尚敵を防がんとまむく軍備を整ゆ折りて賊の勢
 カ日よ月よ猖獗まゝり近幾皆叛きて賊は應に四面
 より京師を窺ひ殆ど危急に至るをみりて天皇急ぎ
 使節を發して義貞を召還さる義貞止を得む敵を捨
 て兵を引て京師に還る初め義貞尊氏追討の勅命を
 奉り京師を發し尾張に至るの時甲斐源氏下山某氏
 及び加賀美某氏美貞を説て曰く今度君の武略より
 て戦ひの利と失るひ人心盡く離散し官軍を叛け
 尊氏又従ぐへ者へ他より人々皇家の偷安を倦て武

家の政事と慕ふが故あり今將軍の為は計策を為
 さんりく自立の旗を翻るへ一不羈獨立して天下は
 霸業を企てたまらざる衆心悅こんで服従し手は唾し
 て大事へ成る益一実よ今世の頼朝あらん疾々思ひ
 立ちまると勸むる詞を聞かぬを嚴然威儀を正し
 て曰くその何を言ふや義貞君ふ對して恩こそあ
 れ毫も恨とあるまゝ一順と捨て逆は效らば何せ
 以て義を知る者とせんやと堅く執て動らざる小
 ぞ二人連は詞を尽し利害を説て勸むれども義貞遠

よ可也二人の遺憾遺る方よく言甲斐多しとや思ひ
 ろん同志船田堀口等と謀り試み檄文を飛して関
 東の諸將に義貞の自立を告げ味方と募集せし武
 田土屋宇佐美小山佐竹桃井石堂小笠原三浦土岐川
 越狩野松田川村武藏の七黨皆悦んであはれ應じ死
 と誓ひて来り集まる是は於て由良船田二人と俱に
 義貞は説て曰く今天下の形勢を察するは只一の檄
 文を飛せしのみよ既に斯の如く衆を得し將軍
 下度事を挙げ自立の旌旗を樹たぬは誰一人應

せざらん假令百の尊氏なりとも敢てまゝ恐るゝと
 足らざ大丈夫事を為さよ何ぞ小事に拘泥をんま
 篤と御賢慮をうまひと誘ふ詞に義貞も暫し
 黙して在りしが諸君の謂るに処利なきよらね
 と彼等我を棄て賊に從ぐよは是勢ひの然らしむる
 ところ止むを得ざるの有様あり假令君をたゞむと
 りども臣以て臣とらざるべからむを我令賊を討て克
 ち自らう以て耻となま況んや彼尊氏が擧げし倣ひ
 賊と為るふ忍びんや其耻を取らぬえんよう義を取

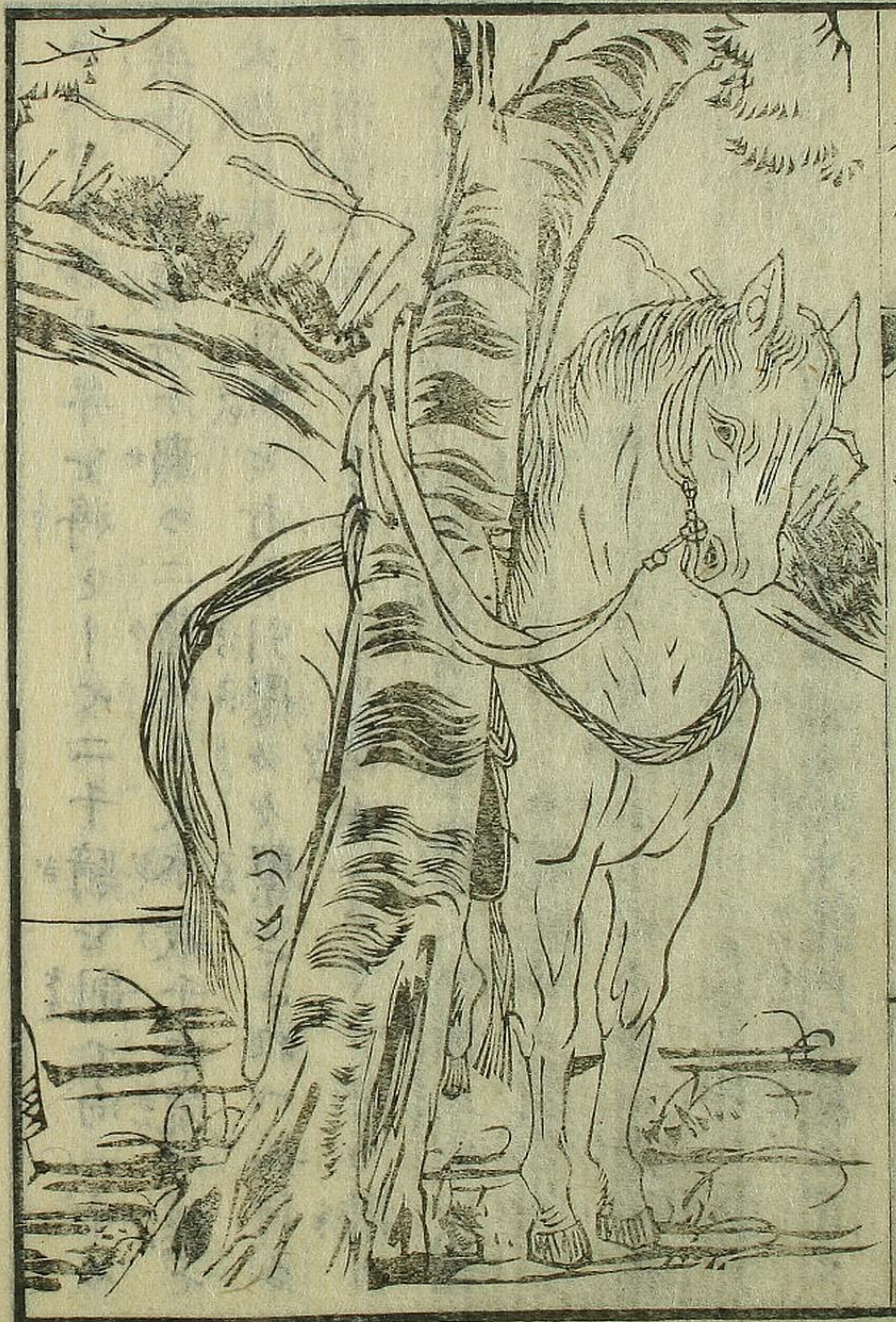
て死するよ如き我心此のおとし去らんと欲する者
 へ去るべく来らんと思ふ来られよ去るも恨まむ
 来るも拒まむ嗚呼何を患へ何をう歎らん
 と威儀を正して言放つ動う難き丈夫の魂ひらひ
 出せし人々も義貞が正義の詞に愧て言由るうくよ
 涙を流して感激せしを尊氏と説し直義道譽と今
 の下山加賀美が詞その事相似てその実異なる彼
 ハ説うして魔道に墮ち賊の汚名を千歳の今に遺せ
 一朝敵とまりあとの飽まで正義を執り赤心報国南

朝の柱礎と美名と輝くを其優劣果して如何有客よ
くく思ひねうし間話休題き尊氏反旗を翻てより
人心王室と厭ひ武断政治と慕ふの故ふや細川定禅
ハ讃岐の佐々木信胤ハ備中ノ富樫何某ハ加賀ノ其
他諸州の豪族一時蜂起して賊ノ應ト四夷ハ蠻
起り合ふて京師ノ急と告ると櫛の齒を挽か如し
延元元年正月尊氏大軍を率めて京師ノ攻入ると聞
えしうの天皇義貞以下の諸將ノ詔のりして賊を防
ぐしむ去程ノ義貞ハ各々要所ノ兵を部署し勢後

口へハ名和長年と將として二千騎を副て向へしめ
供御ノ瀬膳所ケ瀬の二箇所ノ大水數千本流し懸て
大綱と張り乱杭と打ち引懸々々繋ぎされば如何なる
河伯水神なりとも上をも遊ぎ下とも潜り
ぐく準備あさく嚴重あり宇治口へハ楠正成と將
と一五千餘騎を授けし向へしめ橋板四五間外
て河中ノ大石と疊とあげ逆茂木と立し東の岸を高
屏風のおとく切立されを水流二つし分きて石籠と
洗ふ白浪ハ張り落る瀧津瀬の恰も龍門三級のごとく

日本書紀 八編上 十一

長年禁裏の
 廢類を見
 英雄の涙鎧の
 袖に浸し
 惆悵恨
 去る能はま



日本書紀
 卷之八
 八
 八

あり亦敵の陣と取せどとく橘の小島榎島平等院等
 と一字も残らぬ焼拂ひる程に魔風大厦に吹掛て
 見るく黒烟天を掩ひさしも有名き堂塔伽藍も鳥有
 と歸せしぞ淺猿一々れ山崎へも膠屋義助七千余騎
 と率めてうち向ひ大渡の總大將新田義貞諸將を
 部署して左右に従ぐへ一万余騎と引率して親ら
 中軍を備へしう去程に賊將尊氏ハ八十万騎の兵と
 卒に連戦勝を乗じて官軍を追踵し直ち小京師を
 驀入せんと勝誇りする阪東武者とや間近くるる

まよ大渡の西橋詰まで押寄せら橋桁とや渡らま
 川とや渡さんうと彼方此方を見渡さよ橋上橋下
 相共よ敵の準備嚴しければ容易よ渡さへくもあつ
 ぞ如何いせんと猶豫折々官軍の陣より百騎をり
 其の兵川端へ進み出で賊徒の陣へ物申さん治承の
 戦争より足利又太郎元暦より佐々木四郎高綱宇治
 河と渡して名を後代に揚げ候ひまを此河ハ宇
 治河よりも淺く殊に流まも迅うを猶豫たまよ
 よ及ぶまど疾々爰と渡され候らへ斯まをゆよ應

ぜぬちろひ臆病の人々ろろと声々よ呼らりつ或ひ
を嘲り或ひ罵り箠を敲いて吐と笑ふ血氣は迅
る阪東武者敵も招くれず猶豫まへき足を敲ぎて憤
激憎き敵の廣言ろ疾や渡りて決戦せん四
方の民家數百戸と壞ち連ねて二三町ある大筏を
組五百余人の逞兵競ふてられみあみ乗りて棹を
操り漕出しが彼水中より立ち立る乱杭も引掛り押
せとも指とも行やらむ進退爰も谷まうたる官軍得
ろりと射掛る矢の雨のおとく霰のごとく心矢竹よ

迅雄が焦ち騒げど詮術なく筏の更も働らろぞ兎角
まろろち漲る浪も筏の舳と押切られも竿も留ら
ま流されろろがろまよくと矢めくのみ組重ねる杖
木の繫ぎ止めたる繩断て離れくもるりろろ五百
人の兵卒の水も弱きて失もろろ之と見るより官軍
ろ楯と敲き声と揚げ動揺めぬ渡るぞ勇まろろろ已
りて賊兵二万来つて山崎と攻む此隊の大將殿屋
義助善く戦ろひ總軍一度も打て出で東西も開き
合ひ南北も分と追つ返一の半時をろり火花と散

日本小史 八編上 廿四

て相戦ふ汗馬の走違ふ音関の声山は響き地と
動ぐ雌雄未だ決せむ戦ひ既に酣ゆるるに賊
將細川定禅六万余騎と率めて来り援く此を奮ふ
賊軍の勢ひまさしく猖獗をまり息を吐せむ攻む
る官軍たる色を渡り賊は降る者さへ多る故
力究まり勢ひ尽きまゝ如何とを詮術なく義助僅よ
敗兵と纏り義貞の軍と合せんと赤井と拵て落行ハ
山崎の軍の敗れより右ての賊皇居に乱れ入ぬと
覚ゆるを主上と先づ落しまゝうせ而して後と戦ふ

と義貞もまゝ大渡を捨て京師に引返すを左のさせ
トと賊將定禅六万余騎にて追掛り此時を義助
も義貞の軍と合せいふは殿戦せんとして返り合せ
て定禅ふ當り爰に敵を喰止て暫し時を移し義
貞既に皇居に詣りぬんと思ふ程ふ三千余騎と二
手に分て動と叫い賊軍の群が中よ突入りたり
賊軍競ふて義頭を撃取んと自餘の勢も自由鬼
此処に取籠め彼処に寄合ひ競ひ鬼ると事ともせむ
剛氣不放の義頭蹴散し踏退けり敗り圍を突

日本書紀 八編上

て追退け奮戦七八合鎧の袖に切落され曾の鞆も寸
断くよ髪へおどろる振乱を深疵數ヶ所負られ流
血淋漓唐紅ひ僅も馬は助けられ京師へをを入り
たまひ義貞以下江田大館堀口里見大井田等の一族
等と俱も乗輿を奉りて叡山へと落たまふ心の中を
憐れなるその勢僅りよ二萬余騎鳳輦の跡を守禦
して皆東坂本へと馬を早む事の騒がしうり一形
況も只安祿山が潼関の軍は官軍忽ちうち負る
玄宗皇帝蜀の国へ落させたまひ一六軍翠花よ

隨がう、報閣の雲は迷ひ一異るうむ爰はま名
和伯耆守長年の勢多を堅めて居たり一山崎の軍
破して主上叡山へ落させたまひぬと聞き直ち叡
山へ馳参らんと思ひ一今を名残りの大内裏一
目拜して行なわと手勢僅も三百騎を従へ正月十日
の黄昏時ま京師へ帰りける尊氏未だ京師に入
ざりしれど賊軍數万騎うち入り京白河は充満され
太官軍と見るより此は要撃り彼処に遮りいとを
激しく撃惹ると長年更は恐る色なく馳散し之へ

日本書紀 卷之八十一 上 偏上 廿六

うち通り撃破りて四門を脱け十七度まで戦ひつゝ
 よ三百餘騎の勢次第くも撃たれ百騎をりりよ
 りりりり去れども長年屈せを撓まゆ遠く内裏に討
 入りて馬より下り雷と脱ぎ南庭に跪づく主上既に
 内裏をしまし泰山へ臨幸まりて後数刻と過みしと
 るまの四門悉く鎖して宮殿正に寂寞たり然るに
 賊軍乱れ入りりりりと覺多く百官礼儀を調へし紫宸
 殿の上より賢聖の障子引破られ雲臺の画囚此彼
 り乱れり佳人最粧を飾りし弘徽殿の前より翡翠

の御簾半より絶て微月の銀鈎空しく懸まり長年熟
 々あまを視てさしも勇める益良雄も哀れの色や増り
 ろん泪と両眼も浮へる鎧の袖と濡しし愁然として
 立も得去らば且らく徘徊て居りりりり敵の鯨波の
 声近付ぬ斯て果すと氣を励まし陽明門の前より
 馬よりうち乗りつ泰山さして馳行る其後賊軍乱
 入し行幸供奉の人々の屋形々々火を放されば折
 節は風激しく吹布て龍樓竹苑皇后御所烟一時は
 立登り炎四方に充滿されば猛火内裏に燃る向り

前殿後宮諸司八省三十六殿十二門大厦高樓徒ら
よ一時の灰燼とありよ々々を越王呉と亡びて姑蘇
城一片の煙りとあり項羽秦を傾け咸陽宮三月の
火と熾んよせし呉越秦楚の古へも是よりよりや
過ぎざりしと淺猿うりし世間多り

俗通 日本小史八編上卷終

010190512970

